

障害のある同胞がいるきょうだいにおける関係性葛藤の 変化に関する研究 その①

— 葛藤の個別分析の視点から —

斎 藤 富由起・丹 生 栞

A Study of Changes in Relational Conflict among Siblings with Disabled Compatriots Part 1
- From the Viewpoint of Individual Analysis of Conflicts

SAITO Fuyuki · NIBU Shiori

1. 問題提起と目的

1-1. 兄弟研究の特徴としての同胞葛藤

子どもの養育環境において「他者」の始まりである兄弟姉妹との関係はパーソナリティやアイデンティティ、さらには社会的な価値観の形成に深い影響を及ぼす重要な対人関係といえる（e.g., 河合, 1980; 岡崎・杉井, 2004; 磯崎, 2004; 遠矢, 2009）。本章では、以下に兄弟姉妹研究を概観し、その中で障害児・者を兄弟姉妹に持つ兄弟姉妹関係の特徴について整理する。なお、本研究では、伊藤・栗田（2017）に従い、障害児・者を兄弟姉妹に持つ健常のきょうだいを平仮名の「きょうだい」、健常児を兄弟姉妹に持つきょうだいを漢字の「兄弟」とする。また、きょうだいからみた障害児・者を同胞と記述する。

岡崎・杉井（2004）によると、兄弟は最も身近な他者として互いに学び合い、支え合い、影響し合う重要な存在である。依田（1990）は、相互に対立し、張り合っている「対立関係」、仲のよい「調和関係」、どちらか一方が優位に立っている「専制関係」、積極的な交渉が認められない「分離関係」の4つの要因できょうだい関係を説明している。飯野（1984）も「対立関係」、「共存関係」、「保護・依存関係」、「分離関係」の4因子を抽出している。

磯崎（2004）は、兄弟関係は、親密な対人関係の一つであり、その他の対人関係の基礎をなすと述べている。年少者は年長者をモデルとして成長し、年長者は年少者を世話することを通して得られる経験から学ぶだろう。また、年代で共通した話題や遊びを経験ができ、社会的な技能を学習することも兄弟がいることの利点である。この点について、例えば吉田（1980）は兄弟喧嘩が自己抑制や自己主張に

積極的な意味を持つと主張している。

兄弟関係の特徴の一つとして独自の葛藤を指摘する見解は多く、古くはカイン・コンプレックスのように、同胞葛藤として概念化されている（e.g., 河合, 1980; 加藤, 1981）。ユングは兄弟の関係において差別的に親の愛情を受けた場合、それによって苦しんだ原体験は、兄弟以外の関係にも投影されていくことを指摘し、その心的複合体をカイン・コンプレックスと名付けた。

ユング派の分析家である河合（1980）によると、子どもにとって両親（特に母親）と自分の世界は絶対と呼べるほどのものだが、そこに自分とは異なる存在が入り込むことは世界の崩壊にも等しい事態であり、子どもは重大な世界観の改変をしなければならない。しかし、この事態では、受け入れがたい存在を受け入れ、協調性を育む葛藤のプロセスも同時に生じている。河合（1980）は、こうした体験は、人間が社会人として成長するための土台となると述べている。このようにカイン・コンプレックスはネガティブな意味だけではなく、その葛藤のプロセスを通じて人間的な成長がみられるという点に留意するべきである。

力動的立場を離れた兄弟独特の葛藤は同胞葛藤としても概念化されている。加藤（1981）は、同胞が最初に示す反応は敵意であるが、やがて愛情も芽生えてきて、愛と敵意という相反する感情が共存すると述べ、同胞関係の特色に両価的な葛藤があることを指摘している。Cahn（1969）も、このような両価的感情こそが同胞関係の起源に特有であると主張している。大前（1994）は中学生315人を対象に親の偏愛を重視した同胞葛藤尺度を作成した。その結果、「葛藤」「心的距離」「親の独占」の3因子が導かれている。

1-2. きょうだいの葛藤

1-2-1. 対人葛藤

本節では、きょうだい研究の中でも障害児・者と同胞に持つきょうだい間の葛藤の性質を整理したい。片方のきょうだいが障害を抱えている場合、通常のきょうだい関係とは異なる特徴をもつ関係が生じる (e.g., 大瀧, 2011; 伊藤・栗田, 2017)。例えば生活上の世話や特別な対応などにより、家族は障害を持つ同胞に注意が向かいやすくなることが明らかにされている (Lobato, 1983・1985; McHale & Gamble, 1989)。このような要因は家族のあり方に影響を与え、同時にきょうだいにも独特の葛藤を生じさせる (e.g., McHale & Gamble, 1989; Meyer, 1994; 大瀧, 2011)。

Meyer (1994) は、きょうだいが直面する特有の葛藤として、過剰同一視や恥ずかしさ、将来への不安があることを明らかにした。過剰同一視とは、きょうだいが同胞に過剰に同一視し、自分も同胞のように何らかの障害を抱えているのではないかと考えることである。過剰同一視は、障害が軽度で、目に見えにくい場合、より過剰同一視をしやすい傾向にあることが分かっている。また、きょうだいが同胞よりも年上の場合、過剰同一視の可能性は低くなることが報告されている。きょうだいは、これらの不安や恥ずかしさを抱えつつも、両親の思いや同胞への罪悪感により、それを相談することができない。

また Siegl と Silverstein (1994) は、同胞葛藤の影響が強いきょうだいは①親役割を取る子ども、②引きこもる子ども、③行動化する子ども、④優れた行動をとる子どもの4タイプに分類できることを報告している。

親が障害を持つ同胞の世話をきょうだいに課すことで、きょうだいが憤りや不満を持つだけでなく、親に対して両価的な葛藤を抱くこともきょうだい葛藤の一つである (McHale & Gamble, 1989; Meyer & Vadasy, 1994)。これは、親が同胞の世話を課す気持ちも理解できるが、親の愛情の偏りに憤りも感じてしまうという葛藤である。さらに、障害を持つ同胞の世話をするきょうだいが同胞より年下の場合には役割の転換が生じてしまい、不適応感が大きくなることが報告されている (Stoneman, Brody, Davis, Crapps & Malone, 1991)。日本では西村・原 (1996) が、きょうだいは家庭の中で自らの立ち位置や役割の調整を強いられる傾向があることを指摘している。

榎野・大嶋 (2003) は、障害児・慢性疾患患児の

きょうだいは、きょうだい関係を否定的に見ることが多く、精神的健康状態が不良であり、差別を受ける不安を抱えていること、特にきょうだいの男子や末子にとって否定的な影響が大きいことを示唆している。

Jort (2022) は、きょうだいは同胞を愛しているが、同時にけんかや破壊的な行動を困難に感じていると述べており、同胞に対して否定的な感情を抱くと、罪悪感を覚えることがあることを明らかにしている。さらに、この両価的な感情の経験は、きょうだいが繰り返す一つのテーマでもあり、この感情的な葛藤がきょうだいの行動的及び感情的な調整につながると述べている。

以上をまとめると、きょうだいにおける同胞葛藤の性質の一つには、きょうだい間だけでなく、親の偏愛等を中心に家族関係や友人関係にまで及ぶ対人領域の葛藤 (以下、対人葛藤) が存在するといえる。ただし、対人葛藤は必ずしも慢性化するわけではない。田中ら (2011) は、きょうだいは同胞の存在により、家族の絆や責任の重要性を学び、優しさや思いやりを身につけていくこと、伊藤・栗田 (2017) では、一般家庭ではできない体験が出来たことや、思いを共感してもらえたなど、同胞がいるゆえの経験や周囲の理解に対する喜びを感じていることを報告している。

榎野・大嶋 (2003) と田中 (2011)、伊藤・栗田 (2017) は一見対立しているように見えるが、榎野・大嶋 (2003) は思春期で不安定な高校生を対象にしており、田中 (2011)、伊藤・栗田 (2017) は成人を対象にしている。このことから、きょうだい研究は調査を行う時期によって葛藤が報告されやすくなることや、葛藤を乗り越えた結果が報告されやすくなるなど、結果に違いが出る可能性が示唆される。

1-2-2. 将来への葛藤

Wilson ら (1992) は障害の受容がライフサイクルを通じて変化することを明らかにし、障害が同胞だけでなくきょうだいにも、社会的関係などの分野で影響を与えること、多くのきょうだいが障害のある同胞を自身の生涯の責任として捉えていることを報告した。また、原田・能智 (2012) は、きょうだいは自己が独立して主体的に生きることに加えて、同胞の今後や生き方を本人と分け合うようなかたちで自分自身の生の一部のように気づかわざるをえず、その中で自立か家族の尊重のどちらを選択しても安定しない葛藤を抱えていると述べている。伊藤・栗

田（2017）も、きょうだいは同胞の存在が将来の進路選択に影響してくる可能性に悩む傾向があることを指摘している。

将来への葛藤を生じさせている不安の内容は多岐にわたる。自分自身にいつか障害が発生するのではないか、あるいは結婚後に生まれた自分の子どもに障害が遺伝するのではないかという不安（Meyer & Vadasy, 1994）、障害児・者の将来の生活保障や処遇への不安（吉川, 1993）など、さまざまな内容が報告されている。

以上のように、きょうだいはさまざまな種類の不安をかかえ、それらを誰かに相談したい気持ちもあるが、同時に事実を知ることへの不安や現実直視の負担感もあり、将来への不安を解消できない状態が生じやすい。これにきょうだいの同胞葛藤に関する相談先が乏しいという現状も加わり、将来への持続的な葛藤が生じる傾向がある。

1-2-3. 帰属葛藤

遠矢（2004）によると、きょうだいは同胞との間で生じる様々な悩みを家族に相談できないという悩みを持つ。遠矢（2004）はきょうだいが家庭の中でどのような役割を担っているかに注目し、これを家庭内役割と呼んだ。きょうだいは、同胞の障害対応に傾倒する親に気を使い、親に甘える気持ちを抑え、親から期待される「よい子」を演じやすいことや、同胞の存在が影響し、何でも話し合える友人関係を持ってない悩みを持つ傾向が指摘されている（遠矢, 2004；遠矢 2009）。さらに遠矢（2004；2009）は、きょうだいは、自分に焦点があたり、自身を主役として認められる機会が少ないことから、「ひとりぼっち」という孤立感を持ちやすく、家族関係や友人関係において寂しさ、取り残され感、はずれ感などを抱く傾向があると述べている。

また、伊藤・栗田（2017）は、きょうだいが持つ特有の悩みとして、同胞のことを周囲に相談したいものの、友人からどう思われるかわからないという不安を感じたり、同胞に対するネガティブな感情を抱く自分に罪悪感を覚えたりする理由から、結果的に友人に話すことへのためらう葛藤があり、家庭以外の場所でも心理的な孤立感を覚えやすい傾向があることを指摘している。また、障害のある同胞を持つきょうだいの全国的な組織である全国きょうだいの会の副会長を務める藤木（2022）によると、きょうだいが持つ人間関係における孤立感「どこにも自分らしくいられる居場所がない」という形で語られる傾向があることを報告している。

以上をまとめると、きょうだいは、他者とのかわりの中で自分らしくいられる居場所を求めつつも、現実的には得られていない。家庭で表面的には仲良くすごし、学校に友人がいたとしても、心理的には本音を話せる場所がなく、その意味で家庭や学校など自身の所属する場所に違和感や孤立感を覚えている。本研究では、このような集団における孤立感や違和感に関する葛藤を帰属意識の葛藤と定義する。

1-2-4. 社会制度への葛藤

榎野・大嶋（2003）は、不安や抑うつなどの内向的な面や非行的行動面で、兄弟や一人っ子と比べてきょうだいは、より不適応を起こしていることを明らかにした。一方で、同胞の将来への気遣いは、兄弟よりもきょうだいのほうが高かった。加えて、きょうだいは兄弟より多くのストレスを抱えながらもその緩衝要因は概ね同程度しかなく、状況に見合った十分なサポートは得られていないことを報告した。

きょうだい研究を展望した柳澤（2007）は、欧米ではきょうだいの心理社会的問題の社会的なサポートとしてSibshops（Meyer & Vadasy, 1994）やLobato（1985）、McLindenら（1991）、Dyson（1998）らによる「同胞との関係改善プログラム」などがあることを紹介している。そして、基礎自治体などのさまざまな社会資源からそれらがきょうだいに提供されているのに対して、日本では同胞の能力開発的なプログラムが多い反面、きょうだいの同胞葛藤を緩和するようなプログラムの開発が乏しいことを指摘している。

障害児・者と暮らすきょうだいは、家族の中で障害児・者とは別の視点で支援を必要とする存在（柳澤, 2007）だが、先にあげたプログラム以外にも障害者手帳や特別支援学級での教育など、同胞には社会制度としてさまざまなサポートがあるのに対し、きょうだいにはそのような制度的サポートは存在しない。このことから、同胞への制度的なサポートの必要性を理解しているものの、自分にはなんのサポートもないことにネガティブな感情を抱きつつも、家族や同胞の苦労を慮り、その気持ちを表出できない葛藤の存在が仮説として考えられる。本研究ではこうした社会・制度面でのきょうだい支援の不足に関する葛藤を、社会制度への葛藤と定義する。

1-3. 同胞葛藤の受容

同胞葛藤は決して乗り越えられない葛藤ではな

い。きょうだいが自分を受け入れるきっかけとなる出来事として、Kate (2010) は、同胞について情報を得ること、知識を持つことが、自己に対する肯定的な認識と関連すると述べている。また高西・一円 (2015) は、肯定的な第三者との出会い、親との交流、きょうだいの内面の変化といった3つの要因が、きょうだいが自分を受け入れるきっかけに深く関連していることを明らかにした。

藤原・川島 (2011) は、きょうだいが得る糧として、「無意識に封じ込めた苦悩に気づくターニングポイントとなる糧」をあげている。これは、自分の存在意義を問いかけるきっかけとなった人たちとの出会いにより、自分が無意識に封じ込めた苦悩に気づき、向き合う勇気をもって苦悩を認める、あるいは表出することで自分の存在意義を問い直す通過儀礼とも呼べるターニングポイントになると主張している。

きょうだいは、同胞への否定的な思いと肯定的な思いの両方の思いの間で葛藤しながらきょうだい関係を築いていく。その中で、他者との出会いや自身の成長によって、葛藤を乗り越えるという経験を得るのだろう。

以上のように先行研究を整理すると、対人葛藤に多くの研究が集中しており、次いで将来への葛藤の研究が多数報告されている。他方、きょうだいは家族の中で世話役割やいい子役割などの役割を強いられ、本音で話せる居場所がないという指摘は多く、ここから帰属意識の葛藤が仮定できる。友人にも障害を持つきょうだいの話ができないということは学校も自分の抱えている問題を相談できる場所ではないことを意味している。「自分の本音を話せる場所が欲しいけれども、それを言うことに不安を感じ、話や相談ができない」という葛藤は孤立感にも通じるだろう。この葛藤を本研究では帰属意識の葛藤と名付けた。

さらに、柳澤 (2007) が指摘している制度面の支援の少なさに着目すると、社会制度面での葛藤も考えられる。障害者手帳や特別支援学級など同胞には様々な制度面での支援があるが、例えば同じ境遇のきょうだいが集まれる場が制度的に保証されていることや、きょうだいにどのような対応をすればいいのか教えてくれる場が保証されているなど、居場所や相談先、障害への対処スキルなどの提供が社会制度として保証されたら良いという願いを持ちつつ、家庭内役割において「よい子」の役割などを担う自分は、そのような不満は願いを口に出すことができないとも感じ、そうした場所の獲得に踏み出せない

という葛藤の存在も仮定できる。本研究ではこの葛藤を社会制度への葛藤と名付けた。

以上のようにまとめると、きょうだいの葛藤は対人葛藤、将来への葛藤、帰属意識の葛藤、社会制度への葛藤の4つに分類できる (Table 1 参照)。

また、先行研究では、それぞれの葛藤を独立して把握するものが多かったが、本研究ではこれらの葛藤は完全に独立しているのではなく、相互に影響を与え合っていると仮定する。そこで本研究では、4つの関連する葛藤全体を関係性葛藤と名付けた (Figure 1 参照)。関係性葛藤という視点からは、それぞれの葛藤が時間的な推移の中で相互に影響を与えながら変化すると考えられるが、その変化を検証した研究は非常に乏しい。それぞれの葛藤を独立して分析することも重要だが、同胞の関係性を軸とした時間的な変化の中で関係性葛藤がどのように変化をするのかを検証することが望まれる。

2. 目的

本研究では4つの葛藤を個別で分析し、葛藤の性質を検証する。この際、本研究の仮説である帰属意識の葛藤と社会制度の葛藤がきょうだいから語られるかを確認する。

2-2. 方法

(1) 調査協力者：全国きょうだいの会に所属する20代以上のきょうだい7名 (男性2名女性5名 平均年齢28.9歳)。なお本研究では障害の種類は変数として扱わない。また本研究では、自己の経験を振り返り言語化できることが前提となるので、調査協力者は20代以上のきょうだいを対象とした。

(2) 手続き：半構造化面接。インタビューを行う前に、年齢、性別、職業、家族構成を聞くフェイスシートに記入。

(4) 質問項目

同胞・家族について

- ①同胞の障害について (程度等)
- ②同胞に障害があると知った時期。またどのような気持ちだったか。
- ③両親から同胞の障害をどのように伝えられたか。
- ④両親から期待されていると感じたこと。

対人葛藤について

- ①子どものころから現在までの親子関係や、兄弟関係、友人関係の中で、感じた葛藤とその変化。

帰属意識への葛藤について

- ①子どものころから現在まで家族や学校等の社会的な集団の中で、感じた葛藤とその変化。

社会制度への葛藤について

- ①子どものころから現在まで、社会に対しきょうだいの立場から感じた葛藤とその変化。

将来への葛藤について

- ①子どものころから現在まで、さらにこれから経験するであろうライフイベントの中で、きょうだいについて感じた葛藤とその変化。

葛藤の変化について

- ①子どものころから現在まで兄弟関係の中で大きく変化した思い。

(5) 分析方法

分析方法として関係性葛藤の時系列分析には複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model : 以下,TEM) を用いた。TEMとは個人の経験の多様性を描くために、時間を捨象せず人間の多様性や複雑性を扱うための方法論である (サトウ, 2009)。

先行研究を概観すると、質問紙調査ではきょうだいの経験の多様性や、時間経過による変化を捨象してしまう短所があり、面接調査では、少数の事例研究が多く、きょうだいの経験の多様性や変化について知ることが難しい。TEMを使用することで、きょうだいの経験の多様性や変化を時間経過とともに可視化することが可能になると考えた。また、TEMは人間の成長について、その時間的変化を社会・文化的価値観との関係で展望することが出来るため、社会や文化的価値観の変化によってきょうだいの立場の変化についても捉えることが可能であると考えた。以上の理由より、TEMを援用することとした。本研究ではTEMにより時系列で葛藤の変化を整理した。

3. 結果と考察

3-1. 対人葛藤

対人葛藤についてTEMによる分析を行った。これらをモデル化したものが、Figure 1.である。きょう

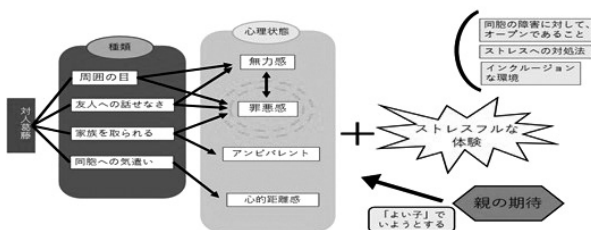


Figure1. 対人葛藤と4つの心理的状態

うだいは友人や家族などに関わっていく中で、ネガティブな葛藤を抱えることが多くあり、その背景にはきょうだいであるからこそ生じる心理状態があると考えられる。

3-2. 将来への葛藤

将来への葛藤についてTEMによる分析を行った。これらをモデル化したものが、Figure 2.である。数々の不安の影響から、自己犠牲と夢をあきらめる無念さを覚えるきょうだいの姿が導かれた。自己犠牲は、自己を犠牲とすることによって、無念ではあるが同胞への介護あるいは親の介護にに応じていくというものである。

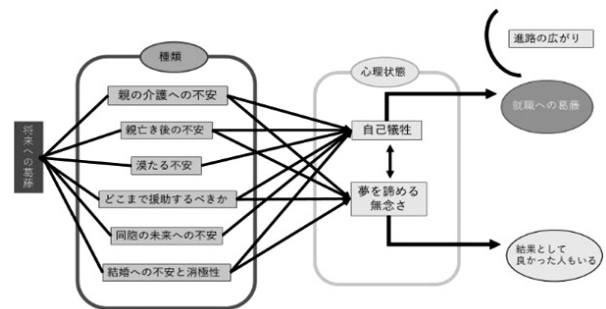


Figure2. 将来への葛藤と2つの心理的状態

3-3. 帰属意識の葛藤

帰属意識の葛藤についてTEMによる分析を行った。これらをモデル化したものが、Figure 3.である。帰属意識の葛藤におけるネガティブな心理状態の中心は、当初は所属集団における違和感であり、やがてそれが強くなるにしたがって、広義の社会からの孤立感が形成されている。

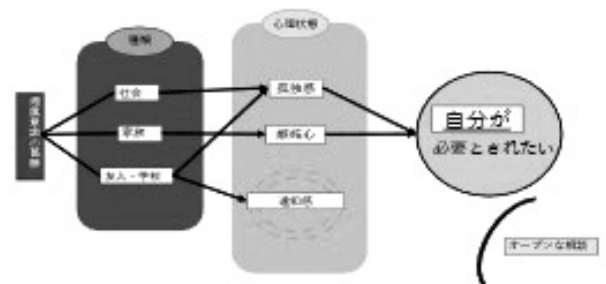


Figure3. 帰属意識の葛藤と3つの心理的状態

3-4. 社会制度への葛藤

社会制度への葛藤についてTEMによる分析を行った。これらをモデル化したものが、Figure 4.である。きょうだいは社会制度への葛藤を抱えており、その内容は制度的な「社会」「親」「きょうだい」「同胞」の4つに対象に分類できた。

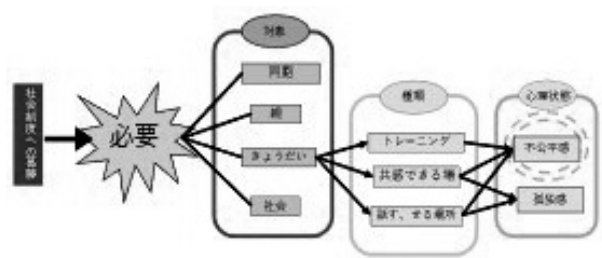


Figure4. 社会制度への葛藤と2つの心理的状态

4. 結果と考察

4-1. 同胞の存在の捉え方と伝え方

きょうだいは同胞の障害について親などから説明を受けた際、＜同胞は同胞である＞と障害の有無に関係なく、同胞自身を受け止めようと考えている者がいる。その一方で、＜同胞のことを分かってあげられない感じ＞、＜他人からの目が気になる＞など、同胞の障害を知り、それによって葛藤を抱える者もいた。

また、どちらの経験をしていても、友人等に同胞の存在を障害があることも伝えることなどのインクルーシブな環境は、対人葛藤や帰属意識の葛藤を結果的に軽減させていた。同胞の障害について、最初から葛藤が少ない者もいたが、ほとんどのきょうだいは何かしらの葛藤を抱えており、その後の経験により葛藤の度合いが変化していた。つまり、葛藤の軽減には、同胞の存在を隠さず、オープンにすることによって、同胞の障害を理解してくれ、同胞に対しても変わらず接してくれる他者との出会いが大きな影響力を持っていることが示された。

4-2. 同胞との物理的な距離

同胞と物理的な距離を取ることによって、同胞と直接関わる機会が減り、きょうだいの葛藤は軽減されていたが、それまでは感じなかった葛藤と直面することにも繋がっていた。特に、将来への葛藤は同胞と物理的な距離を取った後の方が大きくなっていた。これは、進学や就職で家を出る場合に確認される現象であり、それに伴ってきょうだい自身の将来について考える機会が増えたことや、今までは関わったことが無い人とも関わる機会が増えたことが関連していた。

4-3. 本研究の限界

本研究の結果から、インクルーシブ教育が叫ばれる現代にあってもきょうだい葛藤は存在することが指摘できる。他方、そうであるがゆえに、社会制度上の支援が求められる。

本研究では葛藤を4つに分類し、それぞれの内容を検討したが、これらの葛藤は個別に存在するのだろうか。便宜上、その関心のテーマによって分類することはできるものの、現実を感じる葛藤はそれぞれ関連しあい、一つの葛藤を形成しているのではないだろうか。現実により近い心的状態は、関係しあった葛藤である。このように複数の要因が関連しあった葛藤としてきょうだい葛藤をとらえなおすことも今後は求められるだろう。

引用・参考文献

- カーン P. 岸田秀 (訳) (1969) 子どもの兄弟関係 明治図書 (Cahn, P. La relation fraternelle chez l'enfant. Presses Universitaires de France, Paris)
- Dyson, L.L. (1998) A support program for siblings of children with disabilities: What siblings learn and what they like. *Psychology in the Schools*, 35, 57-65.
- 原田 満里子・能智 正博 (2012) 二重のライフストーリーを生きる一障がい者のきょうだいの語り合いからみえるものー 質的心理学研究, 第 11 号, No 11, 26-44
- 藤木 和子 (2022) 「障害」ある人の「きょうだい」としての私 岩波書店
- 藤原 紀世子・川島 美保 (2011) 小児慢性疾患の同胞をもつ青年期のきょうだいがある糧 日本小児看護学会誌, 第 20 号, 1-8
- 飯野晴美 (1984) きょうだい関係ー青年期の 2 人きょうだいー 日本心理学会 第 48 回大会 発表論文集 558.
- 磯崎 三喜年 (2007) 出生順位と生がきょうだい関係の認知と自己評価に及ぼす影響 社会科学ジャーナル COE 特別号 国際基督教大学社会科学研究所, 第 61 号, 203-220
- 伊藤 美咲・栗田 李佳 (2017) 障害児のきょうだいと健常児の兄弟の違いー障害児に対する見方との関連ー 三重大学教育学研究紀要, 第 68 号, 社会科学, 61-67
- Jort, A.J., Elien, E.V., Kees, D.S., & Flooetje, E.S. (2022) Experiences of siblings of children With Neurodevelopmental Disorders: Comparing Qualitative Analysis and Machine Learning to Study Narratives. *Front Psychiatry*.
- Kate, E.Davis (2010) The Psychological Adjustment of Siblings of Children with Disabilities: The Role of the Family and the Wider Social Community. RMIT University.
- 神田橋 條治 (1990) 精神療法面接のコツ 岩崎学術出版社
- 笠田 舞 (2013) 知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセスー中年期きょうだいにとって、葛藤の解決及び維持につながった要因ー 発達心理学研究 第 24 巻 第 3 号 229-237
- 加藤 義明 (1981) 親子関係ときょうだい関係 ふたりっ子 家族の親離れ・子離れ 依田 明・福島 章 (編) 有斐閣
- 河合 隼雄 (1980) 家族関係を考える 講談社
- Lobato, D.J. (1983) Siblings of huncidapped children : A review .*Journal of Autism and Developmental Disorders*, 13, 347-364.
- Lobato, D.J. (1985) Preschool siblings of handicapped children: Impact of peer support and training. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 15, 345-350.
- 槇野 葉月・大嶋 巖 (2003) 「慢性疾患児や障害児をきよ

- うだいに持つ高校生のきょうだい関係と心理社会的適応－性や出生順位による影響を考慮して－」こころの健康, 第18巻2号, 29-40
- McHale, s.m. & Gamble, w.c. (1989) Siblings relationships of children with disabled and nondisabled brothers and sisters. *Developmental Psychology*, 25, 421-429.
- McLinden, s.e., Miller, L.M., & Deprey, J.m. (1991) Effects of a support group for siblings of children with special needs. *Psychology in the Schools*, 28, 230-237
- Meyer, D.j. & Vadasy, P.F. (1994) Sibshops: Workshops for siblings of children with special needs. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.
- 西村 辨作・原 幸一 (1996) 障害児のきょうだい達 (2) 発達障害研究 18 (2) 70-77
- 大瀧 玲子 (2011) 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の外観：きょうだいが担う役割の取得に注目して 東京大学大学院教育学研究科紀要 51巻 234-243
- 大前 泰彦 (1996) 思春期の同胞葛藤に関する研究 兵庫大学大学院学校教育研究科
- 岡崎 有理子・杉井 潤子 (2004) 「青年期のきょうだい関係が社会的スキルおよび自尊感情に与える影響－最も身近に感じるきょうだいとのダイアドな関係性を分析単位として－」奈良教育大学紀要, 第53巻, 第1号, 231-238
- 佐々木 正美 (1998) 子どもへのまなざし 福音館書店
- Siegel, B. & Silverstein, S. (1994) What about me?: Growing up with a developmentally disabled sibling. Perseus Publishing.
- Stoneman, A., Brody, G.h., Davis, C.H., Crapps, J.M., & Malone, D.m. (1991) Ascribed role relations between children with mental retardation and their younger siblings. *American Journal of Mental Retardation*, 95, 537-550.
- 遠矢 浩一 (2004) 発達障害児の”きょうだい児” “支援 キョウダイ児の” 家庭内役割 “を考える 教育と医学 52(12), 40 - 47 慶応義塾大学出版会
- 遠矢 浩一 (2009) 障がいをもつこどもの「きょうだい」を支える お母さん・お父さんのために ナカニシヤ出版
- 高西 麻生・一円 禎紀 (2015) 「障害者のきょうだいが自分を受け入れるきっかけとなった出来事とその変化のプロセス」比治山大学大学院現代文化研究科付属心理相談センター紀要, 第11号, 27-33
- 田中 智, 高田 谷 久美子, 山口 里美 (2011) 障がいをもつ人のきょうだいがとらえる同胞の存在についての認識 *Yamanashi Nursing Journal* Vol.9 No2 53-58
- Wilson C.J., McGillivray J.A., Zetlin A.G. The relationship between attitude to disabled siblings and ratings of behavioural competency. *J Intellect Disabil Res.* 1992 Aug; 36 (Pt 4) : 325-36.
- 吉川 かおり (1993) 発達障害者のきょうだいの意識 親亡き後の発達障害者の生活ときょうだいの抱える問題について 発達障害研究, 14, 253 - 263.
- 吉田 俊和 (1990) きょうだい間の相互作用 大坊 郁夫・安藤 清志・池田 謙一 (編) 社会心理学 パースペクティブ 2 誠信書房 207-214
- 依田 明 (1990) きょうだいの研究 大日本図書

